不定語を含む表現

中　村　理　恵

0．はじめに

いわゆる指示詞「ど」系列に含まれる「なに」「だれ」「いつ」「どこ」「どう」「どんな」などの語を不定語と呼ぶことにすると、不定語を含む表現はその構文・意味の両面において独特の性格をもつ。しかし、従来の不定語に関する研究では、構文の観点から詳しく論じたものは見当たらなかった。そこで、本稿では独自の基準による構文的分類を中心に、構文と意味の両面から不定語を含む表現の特徴を整理することを目的とする。

1．分析方法と分析対象

1.0.　不定語の定義

本稿で不定語として扱う語は、以下19語である。星野・丸山（1993）〔p.57〕「表1．コソアドの体系」における不定の語に、尾上（1983）、奥津（1984）・奥津（1985a）で不定とする語を加えた19語を不定語とした。各語、漢字表記・カタカナ表記についても分析対象とする。

どなた　だれ　どいつ　どれ　いずれ　なに・なん　どちら　どっち
どこ　いずこ　いつ　いくら　いく（＋助数詞）
どんな　いかな　どの　どう　いかが　なぜ

1.1.　分析方法

不定語を含む表現を用例として収集する。それらについて本稿独自の基準による構文的分類を中心に、構文と意味の両面から、不定語の特徴を分析する。分析を進めるにあたり、以下三つの段階を設定した。

○第一段階＝構文的分類の基準を設定し、用例を分類する。
○第二段階＝構文的分類と尾上（1983）の分類をもとにした意味的分類から構文と意味の関連性を考える。
○第三段階＝各語の機能と不定対象を分析する。

分類に際して、不定語19語は基本的に一括して扱う。不定語は用例中【　】で示す。なお、不定語が連体修飾成分の一部になる場合は被修飾名詞まで含めたものを単位とし、用例中では＿＿でその範囲を示す。意味的分類は尾上（1983）の分類をもとにするが、これで説明しきれないものについては本稿独自の新タイプを追加する。構文的分類と意味的分類およびその対応関係の考察をふまえて、各語の機能と不定対象について分析する。

1.2. 分析対象

現代語で書かれた資料から独自に収集した用例953例と、尾上（1983）における現代語の用例107例、計1060例を分析対象とする。

独自に収集する対象ジャンルには小説を選んだ。これは会話文などを含むことにより、書き言葉・話し言葉両面において多様な表現を抽出することが可能と考えられるからである。年代的にはやや幅があるが、表現を見て現代語と認められる8作品を対象とした。

以下、用例の出典を本文中で用いる略号を付して記す。なお、略号は用例に付記する記号（〔○〕、〔**城**〕〔**檸**〕〔**銀**〕〔**パ**〕〔**飼**〕〔**忍**〕〔**樹**〕〔**塩**〕）で示す。

◎　尾上圭介（1983）「不定語の語性と用法」〔○〕

◎　『新潮文庫の100冊』（CD-ROM版）

志賀直哉（1917）「城の崎にて」〔**城**〕　梶井基次郎（1925）「檸檬」〔**檸**〕
宮沢賢治（1933）「銀河鉄道の夜」〔**銀**〕　開高健（1957）「パニック」〔**パ**〕
大江健三郎（1958）「飼育」〔**飼**〕　三浦哲郎（1960）「忍ぶ川」〔**忍**〕
吉行淳之介（1966）「樹々は緑か」〔**樹**〕
三浦綾子（1973）「塩狩峠」〔**塩**〕（初め～“かくれんぼ”（第5章）まで）
…〔**城**〕〔**檸**〕〔**銀**〕〔**パ**〕〔**飼**〕〔**忍**〕〔**樹**〕は全部分、〔**塩**〕は上記部分の全文を対象とする。

1.3. 記述方法・用語

本稿では基本的に用いない用語について、文献中の用語をそのまま使う場合は＜　＞で示す。助詞・助動詞はカタカナで表記し、引用の場合のみ文献中の表現をそのまま用いる。国語辞典は三省堂（1982）を参照する。そのほか、本稿で扱う用語を以下に定義する。

・「末カ連語」

「～カ」が連語を形成するもの。水谷（1983）〔p.53〕では「本来なら文の水準にあるべきものを語の水準に引き下げて使う仕掛け」としている。

水谷（1983）・水谷（1991）においては「【不定語】カ」が一語相当のものも末カ連語である。本稿では、一語相当の「【不定語】カ」は末カ連語の中で特殊なものと位置づけることから別項目とし、「～カ」が一語に相当するもの以外を末カ連語として扱う。

・「格成分」「副詞的修飾成分」

時・数量に関する表現について、格助詞が下接するものは「格成分」、それ以外（係助詞が下接／助詞なし等）は「副詞的修飾成分」とする。

2．先行研究

尾上（1983）は、不定語を含む表現を意味・用法から2系9用法21タイプに分類している。これは不定語すべてを一括して扱う分類であり、カ・モが不定語の意味的分類において深く内面的に結びついていることを指摘する。本稿はこの分類をもとにして意味的分類を行う。

このほか本稿で参考としたものに、＜不定詞＞（本稿では不定語と呼ぶ）8語についてそれぞれ4つの基本型をあげ、不定語が指示する不定対象の前提となる集合に注目して意味・用法を分析した奥津（1984）・奥津（1985a）、＜不定詞同格構造＞と＜不定詞移動＞について構造的特徴を論じた奥津（1985b）、＜間接疑問文＞・＜間接疑問節＞（本稿ではいずれも末カ連語と呼ぶ）を含む表現の構文的特徴と解釈について分析した江口（1990）・江口（1992）・江口（1993）などがある。また、星野（1986）は第五章において「＜不定詞＞モ」の用法を3つに分類し、＜不定詞＞（本稿では不定語と呼ぶ）各語について分析している。

3．構文的分類

3.0. 分類基準

尾上（1983）における〔α〕特定・明確化志向系（以下、〔α〕系とする）と〔β〕特定・明確化不志向系（以下、〔β〕系とする）の2系は、カ・モとそれぞれ結びつくことで構文にも関連すると考えられる。これをふまえて、本稿では、まず不定語とカ・モ（デモ）との関係から2系、さらに構文的特徴からそれぞれ4群、計8群に分類する。

なお、国語辞典で副助詞とするヤラについて、カ・モ（デモ）に準ずる働きであると判断したものは、カ・モ（デモ）と同等に扱うことにする。

3.0.1 〔α〕特定・明確化志向系

〔α〕系はカと密接な関わりをもつ。カを含む表現を中心に、〔α〕系のものを以下の構文的基準により分類する。カ・モ（デモ）を含まないが意味的分類で〔α〕系である表現もここに含める。

まず、文構造に対する不定語とカを含む部分の関係から以下4群に分類する。

Ⅰ「文的」：　不定語とカを含む部分が文を形成する。

Ⅱ「末カ連語的」：不定語とカを含む部分が末カ連語（「【不定語】カ」が一語相当のもの以外）を形成するもの。全体で名詞あるいは副詞に相当する。

Ⅲ「一語的」：　「【不定語】カ」単独で名詞あるいは副詞に相当する。

ⅳ（そのほか）：　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ以外の〔α〕系（慣用化した表現等）。

さらに、構文における不定語の位置から、Ⅰ・Ⅱはa・b・cの3種、Ⅲはa・b・c・d・eの5種にそれぞれ分類する。カ（Ⅰの場合はカをはじめとする疑問（疑・問・反語）に関する文末表現）の位置は、Ⅰ・Ⅱは下記の文型の末尾、Ⅲは不定語の直後となる。

a「格成分」：　【不定語】―格助詞―述語

b「副詞的修飾成分」：【不定語】―述語（Ⅲ…用連語・相連語）

c「述語」：　【不定語】

d「2項構造前項」：　【不定語】カ―体連語

e「ノ連体修飾成分」：【不定語】カ―ノ―体連語

3.0.2 〔β〕特定・明確化不志向系

〔β〕系はモ（デモ）と密接な関わりをもつ。モ（デモ）を含む表現を中心に、〔β〕系のものを以下の構文的基準により分類する。カ・モ（デモ）を含まないが意味的分類で〔β〕系である表現もここに含める。

まず、文構造に対する不定語とモ（デモ）を含む部分の関係から以下4群に分類する。

Ⅴ「単文構造」：　不定語とモが単文中で作用する。

Ⅵ「複文構造」：　複文中の前件に不定語があり、～テモ（デモ）により後件に接続する。

Ⅶ「一語構造」：　「【不定語】モ（デモ）」で一語の名詞あるいは副詞に相当する。

ⅷ（そのほか）：　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ以外の〔β〕系（慣用化した表現等）。

さらに、構文における不定語の位置から、Ⅴ・Ⅵはa・b・cの3種、Ⅶはb・e・fの3種にそれぞれ分類する。モ（デモ）の位置は、Ⅴaは格助詞の前後、Ⅴbは不定語の直後、Ⅴcは述語につくデ（＝助動詞ダの連用形）の直後、Ⅵは下記の文型の末尾（＝テ（デ）の直後、つまり前件の末尾）、Ⅶは不定語の直後となる。

a「格成分」：　【不定語】―格助詞―述語

b「副詞的修飾成分」：【不定語】―述語

c「述語」：　【不定語】

e「ノ連体修飾成分」：【不定語】モ―ノ―体連語

f「一語名詞」：　【不定語】モ―ハ・ナラ・ト・ヨリ…

述語の性質からⅤa・Ⅴb・Ⅴcを以下2種でそれぞれ分類する。ただし、Ⅴcmは存在しないと考えられるため、Ⅴは計5種となる。

n 述語〔否定〕

m 述語〔肯定〕

3.0.3　分類項目一覧

構文的分類と意味的分類の項目をそれぞれ以下にまとめる。

構文的分類項目一覧

不定語の構文的分類

- 〔α〕特定・明確化志向系
  - Ⅰ「文的」
    - Ⅰa「格成分」:【不定語】ー格助詞ー述語ー（カ）
    - Ⅰb「副詞的修飾成分」:【不定語】ー述語ー（カ）
    - Ⅰc「述語」:【不定語】ー（カ）
  - Ⅱ「末カ連語的」
    - Ⅱa「格成分」:【不定語】ー格助詞ー述語ーカ
    - Ⅱb「副詞的修飾成分」:【不定語】ー述語ーカ
    - Ⅱc「述語」:【不定語】ーカ
  - Ⅲ「一語的」
    - Ⅲa「格成分」:【不定語】カー（格助詞）ー述語
    - Ⅲb「副詞的修飾成分」:【不定語】カー用連語・相連語
    - Ⅲc「述語」:【不定語】カ（ダ・デス）
    - Ⅲd「2項構造前項」:【不定語】カー体連語
    - Ⅲe「ノ連体修飾成分」:【不定語】カーノー体連語
  - iv（そのほか）
    - iv G　【不定語】（ダ・デス）《文》
    - iv H　【なん】テ・【なん】ト(いう)・【どんな】ニー述語〔感嘆〕
    - iv Ⅰ B　【どう】カ・【どう】ゾ・【なに】トゾ・【なん】トカ（しテ）・【どう】ニカ（しテ）ー述語〔意志（＝希求）〕
    - iv Ⅰ C　【どう】ニカ・【なん】トカー述語〔実現〕
- 〔β〕特定・明確化不志向系
  - Ⅴ「単文構造」
    - Ⅴan「格成分」／述語〔否定〕:
      【不定語】ー（格助詞⇔）モー述語〔否定〕
    - Ⅴbn「副詞的修飾成分」／述語〔否定〕:
      【不定語】モー述語〔否定〕
    - Ⅴcn「述語」／述語〔否定〕:【不定語】ーデーモー〔否定〕
    - Ⅴam「格成分」／述語〔肯定〕:

【不定語】ー（格助詞⇔）モ・デモ・ダッテー述語〔肯定〕

Ⅴbm「副詞的修飾成分」／述語〔肯定〕：

【不定語】モ・デモ・ダッテー述語〔肯定〕

Ⅵ「複文構造」

Ⅵa「格成分」：

【不定語】ー格助詞ー述語ーテモ・タッテ・タトコロデー《文》

Ⅵb「副詞的修飾成分」：

【不定語】ー述語ーテモ・タッテ・タトコロデー《文》

Ⅵc「述語」：【不定語】ーデモ・ダッテー《文》

Ⅶ「一語構造」

Ⅶb「副詞的修飾成分」：【不定語】モ・デモー述語

Ⅶe「ノ連体修飾成分」：【不定語】モーノー体連語

Ⅶf「一語名詞」：【不定語】モーハ・ナラ・ト・ヨリ…

（そのほか）

ⅷO　【不定語】ー《不限定語》

ⅷP1　【不定語】ートー《否定語》

ⅷP2　《【不定語】を含む平叙文》ートイウー形式名詞ーデハない

ⅷP3　【なに】・【なん】の（ことはない）《文》

ⅷQ　《【不定語】を含む平叙文》ートー述語

ⅷR　（制限無し）

意味的分類項目一覧

・尾上（1983）の分類をもとに、本稿独自の新タイプを追加した。合計26タイプとなる。

・新タイプは〰〰で示す。｛　｝は本稿中の解説箇所。

不定語の意味的分類（尾上（1983）〔p.406〕「不定語の用法」に新タイプを追加したもの）

〔α〕特定・明確化志向系

〔α・1〕特定要求型

A疑問用法

A1驚嘆的受理タイプ

A2詠嘆タイプ

A3疑タイプ

A4問タイプ

A5反語タイプ

B希求用法

- 〔α・2〕未定対象指示型
  - C 不明確項指示用法
    - C1 名詞的不明確項指示タイプ {3.3.}
    - C2 副詞的不明確項指示タイプ {3.3.}
  - D 不明確事態指示用法
- 〔β〕特定・明確化不志向系
  - 〔β・1〕特定放棄型
    - 〔β・1・1〕特定不要型
      - E 汎称用法
        - E1 汎称否定タイプ
        - E2 少数少量タイプ
        - E3 汎称肯定タイプ
        - E4 多数多量タイプ
        - E5 一般性状況語タイプ
        - E6汎称否定性述語タイプ {3.5.}
        - E7 主体態度表明タイプ {3.7.}
      - F 条件一般化用法
        - F1 汎称性条件タイプ
        - F2 逆接条件任意タイプ
        - F3 任意項対比タイプ
        - F4 不限定注釈タイプ
    - 〔β・1・2〕特定不能型
      - G限定拒否用法
        - G1一般的限定拒否タイプ {3.8.}
        - G2慣用句的限定拒否タイプ {3.8.}
        - G3 否定性限定拒否タイプ {3.8.}
      - H「裏面からの指定」用法
  - 〔β・2〕特定不要対象指示型
    - I「某」項指示用法
      - I 1引用中「某」項指示タイプ
      - I 2定対象指示タイプ

3.1. Ⅰ 文的

不定語とカを含む部分が文を形成するもの(引用のトで受けられるものを含む)である。不定語の構文的位置からⅠa・Ⅰb・Ⅰcの3種に細分類できる。

Ⅰa／A4　「どうもありがとう。【どこ】でできるのですか。こんな立派な苹果は。」〔銀〕

Ⅰa／A5　しかし、勝ったところであとに【なに】がのこるというのだろう。〔パ〕

Ⅰb／A3　それからの私は何処へ【どう】歩いたのだろう〔檸〕

Ⅰc／A3　「けれどもほんとうのさいわいは一体【何】だろう。」ジョバンニが云いました。〔銀〕

ⅠはA3・A4・A5のいずれかに当てはまる。いずれもいわゆるA＝疑問用法であり、それぞれA3＝疑タイプ（自問)、A4＝問タイプ（質問)、A5＝反語タイプの意味をとる広義の疑問表現となる。このA3・A4・A5はⅠa・Ⅰb・Ⅰcにそれぞれ見られるものであり、a・b・cのような不定語の構文的位置の特徴に対応するものではない。

3.2. Ⅱ 末カ連語的

不定語とカを含む部分が末カ連語を形成するものである。不定語とカを含む部分、すなわち末カ連語は名詞あるいは副詞相当となる。不定語の構文的位置からⅡa・Ⅱb・Ⅱcの3種に細分類できる。

Ⅱa／D　油井が【何】を考え、どう感じているかも、伊木には不明だった。〔樹〕

Ⅱb／A3　「～。一般には【どう】受けとられているか、そこが知りたいな」〔パ〕

Ⅱc／A3　それが【どう】した訳かその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。〔檸〕

Ⅱc／D　「～ペンキの刷毛のような大きな鼻髭か【どう】かが問題なんだ。～」〔樹〕

ⅡはA3＝疑タイプ（疑問用法)、D＝不明確事態指示用法のいずれかに当てはまる。これらは文全体における末カ連語の構文的なふるまいにより分類される。末カ連語が副詞に相当するものは、文に対して「注釈・挿入句的」あるいは「提示句的」に働き、A3となる。名詞に相当するものは、末カ連語が「不定の事態そのものを対象的に指示する」ので、Dとなる。(尾上（1983)〔p.410、p.414〕) A3・

DはⅡa・Ⅱb・Ⅱcにそれぞれ見られ、Ⅰと同様、a・b・cのような末カ連語内部における不定語の構文的特徴に対応するものではない。

3.3 Ⅲ 一語的

「【不定語】カ」単独で名詞あるいは副詞相当となるものである。「【不定語】カ」の構文的位置からⅢa・Ⅲb・Ⅲc・Ⅲd・Ⅲeの5種に細分類できる。

Ⅲa／C1　貞行は【何】か（を）考えているらしく返事はない。〔塩〕※

Ⅲb／A3　ジョバンニは【なぜ】かさあっと胸が冷たくなったように思いました。〔銀〕

Ⅲb／C2　「そういえば、【いくら】か似ていらっしゃるわね」〔樹〕

Ⅲc／C1　その頃ひとびとは醜聞の噂話に没頭するか、けんめいに醜聞の噂話を消してまわるかの【どちら】かで、～〔パ〕

Ⅲd／A3　「～。それから【何】かおもしろいものがありましたか」〔塩〕

Ⅲe／C1　そして、その像の中には、伊木にとって必ず【何】かの形で棘が隠れていた。〔樹〕

ⅢはA3＝疑タイプ（疑問用法）、C＝不明確項指示用法のいずれかに当てはまる。「【不定語】カ」が示す疑問内容に対し、「特定できないが」という意味で「注釈・挿入句的」に働くものがA3、不定の人・物・数・時・場所等を「対象的に指示する」ものがCとなる。（尾上（1983）〔p.410、p.414-415〕）

Cはその構文的なふるまいから本稿独自に2タイプに細分類する。名詞相当のものをC1＝名詞的不明確項指示タイプ、副詞相当のものをC2＝副詞的不明確項指示タイプと名づける。なお、※の例で（　）を省略した場合のように格助詞は省略されているものの、述語に対して格成分になっていると考えられる「【不定語】カ」は、Ⅲaに分類する。Ⅲは、a・b・c・d・eの構文的位置の特徴と意味的分類において、以下の表1のような対応関係がある。

表1　Ⅲの各種とA3・C1・C2の対応関係

	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc	Ⅲd	Ⅲe
A3		◎		◎	
C2		◎			□
C1	◎		□		□

◎：尾上（1983）・『新潮文庫の100冊』の両方に用例が見られるもの
□：『新潮文庫の100冊』のみに用例が見られるもの

3.4. iv　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ以外の〔α〕特定・明確化志向系表現

〔α〕系の表現で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに当てはまらないものである。カ・モ（デモ）を含まない表現のうちカを含むものの周辺に位置するものや慣用化・特殊化した表現等がある。

iv G／A1　「【なん】だ、のみやの娘か。それじゃ、これからそこへ飲みに行こう」〔樹〕

iv G「【不定語】（ダ・デス）《文》」は、意味的分類ではA1＝驚嘆的受理タイプ（疑問用法）となる。不定語は不定語一語または不定語を含む短い表現という形で先にあり、その内容の明確化は後続文にゆだねられる。

iv H／A2　信夫は、自分にも妹か弟がほしいと、【どんな】に思ったことだろう。〔塩〕

iv H「【なん】テ・【どんな】ニ…―述語〔感嘆〕」は、意味的分類ではA2＝詠嘆タイプ（疑問用法）となる。構文的には、感嘆の態度を伴う述語に対して副詞的に働く。

iv Ⅰ B／B「いけません。【どう】ぞ、そのままにしていてください。」〔忍〕

iv Ⅰ C／C2 ～あれを聞いていたらもう少し【何】とか手の打ちようを考えられたでしょう。〔パ〕

iv Ⅰ B「【どう】ゾ・【なん】トカ（シテ）…―述語〔意志（＝希求）〕」は意味的分類でB＝希求用法、iv Ⅰ C「【どう】ニカ・【なん】トカ－述語〔実現〕」はC2＝副詞的不明確項指示タイプとなり、いずれも述語に対して副詞的に働く。これらは述語の性質に相違があり、iv Ⅰ Bは意志（＝希求）つまり未来の内容、iv Ⅰ Cはすでに実現した過去の内容である。また、iv Ⅰ Cは実現したことに対する不定項を対象的に指示しているのでCであり、実現への志向を意味するBとは意味的に異なる。

3.5.　V　単文構造

不定語とモが単文中で作用するものである。不定語の構文的位置、及び述語の性質から、V an・V bn・V cn・V am・V bmの5種に細分類できる。

V an／E1　部屋には【誰】もいなかった。〔飼〕

V bn／E2　外に出て、【何】歩も歩かぬうちに、～たちまち雨でずぶぬれになってしまった。〔塩〕

V bn／E5「～その点ぼくには【どう】も正体がハッキリしないんだな。～」

〔パ〕

Ｖcn／Ｅ6　これは局長の独創でも【なん】でもない、使い古された手だ。〔パ〕

Ｖam／Ｅ3　「鷺です。」ジョバンニは、【どっち】でもいいと思いながら答えました。〔銀〕

Ｖbm／Ｅ4　〜、三々九度も、ふつうの盃を【なん】どもやりとりしておこなうのである。〔忍〕

Ｖbm／Ｅ5　伊木は、【いつ】も教室で眺めていた少女の顔を思い出そうとした。〔樹〕

ＶはＥの６種（新タイプを含む）のいずれかに当てはまる。Ｅはいずれも汎称性をあらわすものであり、尾上（1983）はそれぞれE1＝汎称否定タイプ、E2＝少数少量タイプ、E3＝汎称肯定タイプ、E4＝多数多量タイプ、E5＝一般性状況語タイプとしている。

Ｖcnのように不定語が汎称否定性をもつ述語となるものは、新タイプのE6＝汎称否定性述語タイプとする。内容はE1と同じ汎称否定であるが、不定語が述語としてあらわれる点でE1と異なる。

a・b・cの構文的位置の特徴、およびn・mの述語の性質によるＶの分類は、以下の表２のような意味的分類との対応関係がある。

表２　Ｖの各種とＥの各タイプの対応関係

	Van	Vbn	Vam	Vbm	Vcn
E1	◎	□#			
E2		◎			
E3			◎	□#	
E4				◎	
E5	◎#	◎	□#	◎	
E6					□

◎：尾上（1983）・『新潮文庫の100冊』の両方に用例が見られるもの
□：『新潮文庫の100冊』のみに用例が見られるもの
#：何らかの制限をもつ特殊例

「#」について、Ｖbn／E1・Ｖbm／E3は特殊な構文型（「【不定語】―モ（デモ）―体連語―格助詞―述語」あるいは「体連語―格助詞―【不定語】―モ（デモ）－述語」）をとる用法である。また、Ｖan／E5・Ｖam／E5は場所に関わる格成分である。尾上（1983）〔p.420-421〕では「時・所・様態等に関する」成分の一般性をあらわす表現をE5とするのに対し、本稿の構文的分類では場所の格助詞を伴うものを格成分とする点で異なる立場をとる。以上により、これらはそれぞ

れ構文と意味の対応関係を考察する上で特殊な例といえる。「#」以外はVにおいて構文と意味はほぼ対応している。

3.6. Ⅵ　複文構造

複文中の前件に不定語があり、「～デモ（デモ）」によって後件に接続するものである。不定語の構文的位置から、Ⅵa・Ⅵb・Ⅵcの3種に細分類できる。

Ⅵa／F1　【いずれ】にしても春の恐慌はさけられないのだ。〔パ〕

Ⅵb／F2　「そう、いちいちひっかかっていたら、時間が【いくら】あってもたりないよ。」〔忍〕

Ⅵb／E5　「～あの学校が焼けたことだけは、【どう】しても想像できなかったの、～」〔忍〕

Ⅵc／F2　「～【どんな】つらいことでも～みんなほんとうの幸福に近づくーあしずつですから。」〔銀〕

Ⅵは、意味的分類ではF1＝汎称性条件タイプ、F2＝逆接条件任意タイプ、E5＝一般性状況語タイプのいずれかに当てはまる。このうちE5はⅥb「【どう】し―テモ・タッテ・タトコロデ―《文》」のみであり、ほかはすべてF1・F2である。

F1・F2は共通して条件一般化用法である。F1・F2はⅥa・Ⅵb・Ⅵcにそれぞれ見られるものであり、a・b・cのような不定語の構文的位置の特徴に対応するものではない。そもそもF1・F2は意味において「連続する」（尾上（1983）〔p.422〕）ものであり、はっきりした境界は理解し難い。

「【どう】しテモ」は、尾上（1983）では「状況語」すなわちE5として扱う。本稿では、これを条件部分つまり複文中の前件ととらえ、構文的分類ではⅥbとする。

3.7. Ⅶ　一語構造

「【不定語】モ（デモ）」で一語の名詞あるいは副詞となるものである。不定語の構文的位置から、Ⅶb・Ⅶe・Ⅶfの3種に細分類できる。

Ⅶb／E7　「いや、それは、【なに】も君を無視したわけではないんだ。～」〔パ〕
（【なに】モ＜頭高型＞ー述語〔否定〕）

Ⅶb／E7　そしてそのこどもの肩のあたりが、【どう】も見たことのあるような気がして、～〔銀〕　（【どう】モー述語〔推量〕）

Ⅶb／E7　本村さんは【なん】でも腕のいいセールスマンだとかで、収入も

多いし、性格もりっぱな、よい人だというんです。〔忍〕

（【なん】デモ＜頭高型＞―述語〔伝聞〕）

Ⅶb／E7　【どう】やらネズミは約束の地を発見したらしかった。〔パ〕

（【どう】ヤラ―述語〔推定〕）

Ⅶb／E5　「ええ、【どう】も済みませんでした。」〔銀〕

（【どう】（モ）―述語〔感謝・謝罪〕）

Ⅶe／E4　灰色の色紙を切り抜いて貼り付けたように見える【幾】本もの煙突。〔樹〕

Ⅶf／E5　しかし、その日の木場は、【いつ】もと様子がちがっていた。〔忍〕

Ⅶは、意味的分類ではE4＝多数多量タイプ、E5＝一般性状況語タイプ、そして新タイプのE7＝主体態度表明タイプのいずれかに当てはまる。

E7はⅦbにあらわれる。この「【不定語】モ」は、述語の内容に対して「表現主体の詠嘆的態度を表明した部分」（星野（1986）〔p.83〕）であり、汎称用法が慣用化した特殊なものととらえられることから、E7＝主体態度表明タイプとした。この「【不定語】モ（デモ）」は国語辞典で一語の副詞として扱われるもので、陳述副詞的な働きをもつ。尾上（1983）ではE5とする「【どう】モ―述語〔感謝・謝罪〕」も、この点でE7と共通する。

Ⅶe・Ⅶfは多数多量をあらわすE4と時の汎称性をあらわすE5に限られる。Ⅶe・Ⅶfの「【いつ】モ」は国語辞典で一語の名詞とするもので、Ⅴbmのように「【いつ】デモ・ダッテ」にならず、意味も異なる。（国語辞典の意味記述は、Ⅴbm「どんなばあいでも。つねに。」、Ⅶe・Ⅶf「ふだん。」）

以上のようにⅦは慣用化がすすんだ特殊な表現であり、とり得る不定語やその意味・用法は限定される。

3.8. ⅷ　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ以外の〔β〕特定・明確化不志向系表現

〔β〕系に分類される表現のうち、先に述べたⅤ・Ⅵ・Ⅶに当てはまらないものである。カ・モ（デモ）を含まない表現のうちモ（デモ）を含むものの周辺に位置すると思われるものや、慣用化・特殊化した表現等がある。

ⅷO／F4　【どこ】で修行したを問わず、一定期間話芸を修行したものは……〔○〕

ⅷOは意味的分類でF4＝不限定注釈タイプとなる。「不限定の意味の語をわざわざ用いてx項を特定しないことを積極的に表現したもの」で「【不定語】－《不

限定語》」部分は「後続部分で示される事態に対する注釈句」として働く。(尾上(1983)〔p.424〕)

viii P1／G2　そして【何】となく、いつも立ちどまってしまうのだ。〔塩〕

viii P2／G1　このやり方はべつに【いつ】どこで習ったというわけではない。〔○〕

viii P2／H　勉強というものは、【誰】に頼まれてやるというものではない。〔○〕

viii P3／G3　「さ、いこう。【なに】、ただの溜池さ。いつまで見てたって仕様がないよ。」〔忍〕

viii P1「【不定語】—ト—《否定語》」、viii P2「《【不定語】を含む平叙文》—トイウ—形式名詞—デハない」、viii P3「【なに】・【なん】の(ことはない)《文》」は意味的分類でG＝限定拒否用法、H＝「裏面からの指定」用法となる。G・Hはきわめて「近接している」ものであり、いずれも「x項の特定の不可能を主張する」(尾上(1983)〔p.425、p.427〕)。viii P2にこの両者が見られ、構文的にも差異はない。

尾上(1983)においてタイプ分けがなされていないGについて、本稿独自にG1・G2・G3の3タイプに細分類し、それぞれG1＝一般的限定拒否タイプ、G2＝慣用句的限定拒否タイプ、G3＝否定性限定拒否タイプと名づける。G1はGの定義どおりのもの、G2はG1が構文・意味において慣用句的表現に発展したもの、G3は遭遇した対象に対する否定の態度を示すために不定語を用いるものである。G3は、「なに」「なんの」といった国語辞典で感動詞とするものも含まれ、さらに慣用化のすすんだ表現といえる。

Gの3タイプの分類は構文的な特徴に関係するものであり、G1はviii P2、G2はviii P1、viii G3はP3にそれぞれ対応する。HはG1と同じviii P2となる。

viii Q／I 1 信夫自身、とりたてて【何】になろうと思ったことがない。〔塩〕

viii Q「《【不定語】を含む平叙文》—ト—述語」は意味的分類でⅠ1＝引用中「某」項指示タイプとなる。「引用文中の空欄」を空欄のまま指示する。(尾上(1983)〔p.427-428〕)引用文部分は平叙文であり、不定語は空欄となる内容を代用する。不定語は引用文中で各語の機能の範囲でふるまうほかは、構文的な制限を受けない。

viii R／I 2　【ナン】でしたら、私の方から参りますが……〔○〕

viii Rは構文的な制限を受けない。意味的分類ではⅠ2＝定対象指示タイプとなる。ことばでの特定を避ける、あるいは省くために定対象を「ナニ」で指示するものである。

3.9. 構文的分類と意味的分類の対応関係

構文的分類と意味的分類の両面からの分析結果をもとに、構文的分類と意味的分類の対応関係を整理したものが表3である。

この表から、不定語を含む表現は構文と意味において細部にわたるまでかなり整理された対応関係が認められる。したがって、カ・モ（デモ）との関係をはじめとする構文的特徴と意味内容は深い関連があると考えられる。

表3　構文的分類と意味的分類の対応関係

	A3	A4	A5	D	C	A1	A2	B	E1	E2	E3	E4	E5	E6	E7	F1 F2	F4	G2	G1 H	G3	I1	I2	
Ⅰ	◎	◎	◎																				Ⅰ
Ⅱ	◎			◎																			Ⅱ
Ⅲ	◎				◎																		Ⅲ
ⅳG						◎																	ⅳG
ⅳH							◎																ⅳH
ⅳⅠB								◎															ⅳⅠB
Van									◎				#										Van
Vbn									#	◎			◎										Vbn
Vam											◎		#										Vam
Vbm											#	◎	◎										Vbm
Vcn														□									Vcn
Ⅶb													#		◎								Ⅶb
Ⅶe												□	□										Ⅶe
Ⅶf													□										Ⅶf
Ⅵ													#			◎							Ⅵ
ⅷO																	○						ⅷO
ⅷP1																		◎					ⅷP1
ⅷP2																			○				ⅷP2
ⅷP3																				□			ⅷP3
ⅷQ																					◎		ⅷQ
ⅷR																						○	ⅷR
	A3	A4	A5	D	C	A1	A2	B	E1	E2	E3	E4	E5	E6	E7	F1 F2	F4	G2	G1 H	G3	I1	I2	

◎：尾上（1983）・『新潮文庫の100冊』の両方に用例が見られるもの
○：尾上（1983）のみに用例が見られるもの
□：『新潮文庫の100冊』のみに用例が見られるもの
#：何らかの制限をもつ特殊例（尾上（1983）と本稿のとらえ方が異なるものなど）

4．各語の機能

不定語単独の場合、構文における機能は以下の４種類がある。

名詞　副詞　連体詞　接頭語

また、不定語の不定対象は以下の７種類を設定した。

複数項目　場所　人　時　様態　理由　数量・程度

この７種類以外の名詞について広く不定対象にとれるものが「なに」である。

各語の構文的機能と不定対象の特徴を整理すると表４のようになる。

この表から、各語の構文的機能と不定対象とする意味内容はそれぞれ関連するものであり、各語は固有の特徴をもつことが考えられる。

また「【不定語】カ」「【不定語】モ（デモ）」が一語相当の場合、構文的機能と不定対象の意味内容はともに不定語単独の範囲内となり、意味の特殊化・慣用化がすすむ傾向がある。

表４　各語の構文的機能と不定対象

	【不定語】				【不定語】カ		【不定語】モ		【不定語】（　）
	名詞	副詞	接頭語	連体詞	名詞	副詞	名詞	副詞	副詞的
どっち	◎２項目 △場所				△（２項目）				
どちら	◎２項目 ◎場所				◎２項目				
いずれ	◎複数項目	○時［未来］ △（複数項目）			△(複数項目)				
どれ	◎３項目以上				△(3項目以上)				ホド・クライ 〈◎量・程度＃２〉
どこ	◎場所				◎場所				
いずこ	△（場所）				△（場所）	(○場所)			
だれ	◎人				◎人				
どなた	△（人）				△（人）				
どいつ	△（人） △（複数項目）				△（人）				
なに	◎［　］		◎数◎性質		◎［　］◎数［少］ ◎性質	(○［　］) ◎数［少］	◎数［多］	◎［陳述］ ◎数［多］	
いつ	◎時	◎時				◎時	◎時		
どう		◎様態				◎様態		◎［陳述］	
いかが		◎様態							
なぜ		◎理由＃１				◎理由＃１			
（どうして／なんで）		◎理由＃１			◎量･程度［少］				
いくら	△（値段）	△（値段） ◎量・程度＃２				◎量･程度［少］			
いく			◎数			◎数［少］	◎数［多］	◎数［多］	フウニ・ニ 〈◎様態〉
どんな		△様態＃３		◎様態・性質					
いかな				△（様態・性質）					テイド･クライ 〈◎量･程度＃２〉
どの				◎複数項目					

◎：分析対象とした用例に見られるもの

○：分析対象とした用例に見られるもので、用法に制限のあるもの

△：分析対象とした用例には見られないが、内省により存在が認められるもの

＃１：疑問表現に限定される。構文＝Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・iv、意味＝A3・A4・A5

＃２：「いくら」はⅤ・Ⅵ、「【どれ】ホド・クライ」／「【どの】テイド・クライ」は疑問表現（Ⅰ・Ⅱ）。

＃３：「どんな」が様態の不定語となるのは述語の場合に限定される。

5．おわりに

本稿では、不定語を含む表現の構文的分類を中心に、構文と意味の関連性および各語の機能を考察し、不定語を含む表現の特徴を整理した。

構文的分類と意味的分類の分析から、不定語を含む表現は構文と意味において細部にわたるまでかなり整理された対応関係があることを指摘した。これにより、カ・モ（デモ）との関係をはじめとする構文的特徴と意味内容は深い関連をもつと考えられる。不定語各語においても、それぞれ構文的機能と不定対象の内容は関連し、各語が固有の特徴をもつ。

また、不定語を含む表現は構文・意味において独特であり、分析すべき問題が多数ある。その一部として、疑問表現における文末表現や末カ連語を含む表現、「【不定語】カ」「【不定語】モ」について各論的な考察を行ったが、これは紙幅の都合により割愛した。

そのほか、奥津（1985b）・江口（1990）などで構文的類似が指摘される数量詞をはじめ、不定語を含む表現以外と比較・分析することも、不定語を含む表現の特徴を明らかにする上で有意義な視点であると思われる。

〔参考文献〕

(1) 見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武（1982）『三省堂国語辞典 第三版』三省堂.

(2) 尾上圭介（1983）「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院, 404-431.

(3) 水谷静夫（1983）「国文法素描」『朝倉日本語新講座 3 文法と意味Ⅰ』朝倉書店, 1-80.

(4) 奥津敬一郎（1984）「不定詞の意味と文法－「ドッチ」について－」『都大論究』21, 1-16.

(5) 奥津敬一郎（1985a）「続・不定詞の文法と意味」『人文学報』173, 1-23.

(6) 奥津敬一郎（1985b）「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』22, 1-12.

(7) 星野和子（1986）『現代語における「も」の用法』東京女子大学日本文学科.

(8) 江口正（1990）「日本語の間接疑問文の構文論的特徴」『九大言語学研究室報告』11, 41-53.

(9) 水谷静夫（1991）『稿本国文法大体』東京女子大学日本文学科.

(10) 江口正（1992）「間接疑問節と格標識」『KLS』12, 120-129.

(11) 江口正（1993）「間接疑問節の２つの解釈」『九大言語学研究室報告』14, 51-68.

(12) 星野和子・丸山直子（1993）『日本語の表現』圭文社.

（なかむら　りえ　2002年　日文卒）